

出帆400年を前に記念シンポジウム

支倉常長は真の国際人

サン・ファン館で講演、ディスカッション



支倉常長の人物像と慶長使節の意義を探究したシンポジウム＝サン・ファン館

「慶長使節」の意義を探究

「慶長使節400年記念シンポジウム」が3日、石巻市渡波の県慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)で開かれ、基調講演とディスカッションを通じて、支倉常長ら慶長使節がもたらした歴史と文化、その意義を探究した。参加者は政宗の壮図と使節の偉業を再認識し、約400年前に石巻・月浦を出帆したロマンに浸っていた。慶長遣欧使節船協会、仙台市博物館が主催した。

基調講演では、元仙台市博物館館長の佐藤一氏が「大使支倉常長とその人となり」の題で、国際人としての常長像を紹介。「スペイン国王をはじめ海外での評価は高い。日本および日本人を初めてヨーロッパの人々に印象つけたという点で、その役割を果たした真の国際人と言える」と常長を評価した。

ディスカッションでは、石巻若宮丸漂流民の会事務局長の大島幹雄氏と、石巻市教委生涯学習課課長補佐の佐々木淳氏の2人がパネリスト、サン・ファン館館長の浜田直嗣氏がコーディネーターを務め、「慶長使節の偉業と国際感覚」の題で意見を交換した。

大島氏は「積極的に交易を求めた慶長使節。遭難してくしくも日本人で初めて世界一周した若宮丸漂流民。違いはあるが、漂流民にもあえてロシアに残ろうとした者たちもいた」と指摘し、今に伝わる港町・石巻の国際精神を探究することの意義を強調。

佐々木氏は「スペインが独占していた交易圏に割り込もうとしたのが伊達政宗であり、その大使が常長だった。もしも天下統一がなっていなかったら、使節の目的が達成していたら新しい東北ができていたかもしれない」と歴史の夢を語り、あらためて使節の偉業を評価することの大切さを説いた。

多くの市民が詰め掛

「大島氏は「積極的に交易を求めた慶長使節。遭難してくしくも日本人で初めて世界一周した若宮丸漂流民。違いはあるが、漂流民にもあえてロシアに残ろうとした者たちもいた」と指摘し、今に伝わる港町・石巻の国際精神を探究することの意義を強調。

け、熱心に聴講。約400年前の大航海に思いをはせながら、慶長使節がもたらしたものを現代に継承し、生かしていくことの大切さを学んだ。

慶長遣欧使節が外交交渉を目的に、仙台藩主・伊達政宗の命を受けてサン・ファン・パウティスタ号で石巻・月浦を出帆したのは1613年10月28日。来年が出帆400周年の節目に当たる。シンポジウムは出帆400年に向けて未来を語り合おうと企画された。18日は午後1時半から仙台市博物館で開かれ

2012.11.4(日) 石巻かほく